

腐女子の「ファンタジー・トラブル」

—— 身体・欲望・妄想をめぐるBLファンタジーの存在論

張瑋容

(同志社女子大学)

従来のBL(ボーイズラブ)研究において、男同士の親密関係をめぐる腐女子の欲望や、ジェンダー規範の解放などが議論されてきた。BLの実写映画やドラマの増加により、腐女子の限界を超えてより多くの人々に触れられるようになりつつある今日、BLが異性愛中心主義のジェンダー構造にもたらず攪乱をより包括的に分析する論点が必要になる。本稿はラカン批評を中心とするフェミニズムの議論を基に、「男」「同士」の「関係性」をめぐるファンタジーを構造化する理論構築を目的とする。まずは、象徴界、想像界、現実界といったラカンの概念を用いて、BLファンタジーの構造化を試みた。次に、BLファンタジーを表す「攻め×受け」の造形に着目し、BLと異性愛中心主義とのパロディ的な対峙関係を論じた。最後に、本稿の議論を「BLファンタジーの存在論」で締め括り、そこから異性愛中心主義の強固さと滑稽さを追究する姿勢を示すことで、BL研究を新たな次元に導くルートの開拓を試みた。

キーワード

フェミニズム、セクシュアリティ、精神分析、象徴界／想像界、異性愛中心主義

I. はじめに

男同士の同性愛的な親密関係をモチーフとした少女マンガのサブジャンルは、70年代の「少年愛」の誕生から、80年代の「やおい」ブームを経て、90年代以降にBL(ボーイズ・ラブ)というジャンルに定着してきた。従来スティグマ化され、抑圧されてきたこのジャンルは、ファンダムの分野においても主流のメディアにおいても可視化されつつある。たとえば、少年マンガの

女性ファン層の拡大が見られ、それらの男性キャラクターの親密関係を描写する二次創作もファンダムの中で人気のジャンルとなっている。また、人気俳優を起用するBLマンガの実写ドラマや映画の増加は、BLが「2次元」の世界を超えて、「3次元」の世界にも影響を及ぼしていることを示している。

学術の世界においても、BLに関する豊かな研究成果が蓄積されており、とりわけBL

に描かれる男同士の親密関係の解釈と分析は共通の関心とされてきた。たとえば、男同士の親密関係をめぐる腐女子¹の「妄想」の構築（東 2009, 2010; 張 2013）、異性愛中心主義のジェンダー構造にBLがもたらす攪乱（溝口 2015, 2017）、女性の欲望の主体性（藤本 2007; 上野 2007; 金田 2007; 相田 2008; 守 2010）など活発な議論が挙げられる。こうした研究は、ジェンダー構造の批判と脱構築を試みるにあたってBLという媒体に着目する、というアプローチを示唆しているとも言える。これまでの研究成果をさらに展開させるためには、BLの捉え方を改める必要があるように考える。なぜならば、BLの内容とコンテンツ形式が多様化しつつある中で、BLを異性愛中心主義と対抗的な位置に置いて議論するような捉え方では、BLと異性愛中心主義の複雑な関係性を簡略化してしまうからである。

従来のBL研究の捉え方には、もう一つの問題点がある。BLの最も重要な要素は男同士の親密関係の描写なので、ほとんどの分析は男性キャラクターの「関係性」に焦点を当てている。中では、BLにおける男性同性愛というモチーフの役割の分析はあるものの、そもそも男性キャラクターという存在に対して腐女子が熱い眼差し、欲望や妄想ファンタジーを持つことは当然視されており、十分に学術研究に取り上げられているとは言い難い。すなわち、腐女子のファンタジーは「男同士」の「関係性」で構成されるとしか考えておらず、「関係性」にのみ着目するこれまでの研究の視点に偏

りがあると言わざるを得ない。そこで、腐女子のファンタジーを「男」「同士」の「関係性」という重層的な構造と捉え、この構造をより包括的に分析するための理論構築が必要になる。

BLの多様化と受容者層の拡大に鑑みて、本稿は「男性の同性愛的関係をモチーフとする作品」（オリジナル作品と二次創作を含む）における女性ファン（＝腐女子）の「男」「同士」の「関係性」をめぐるファンタジーを「BLファンタジー」とし、この重層的なファンタジー構造を包括的に分析するための理論構築を目的とする。以下、まずはこれまでのBL研究を概観し、問題点を整理する。次に、ラカンの精神分析論とフェミニズムの批判を検討することで、BLファンタジーの構造化を試みる。その上で、BLと異性愛中心主義の構造との複雑な関係性を分析するにあたって、男性キャラクターの身体をめぐる腐女子の言説に焦点を当て、議論を展開していく。本稿は「ファンタジー」に軸を置いてBLを考察するというアプローチを提示し、理論の検討を行うことで、作品や実践が主な分析対象とされる従来のBL研究において十分に行われてこなかった理論構築を補うことを目指したい。

II. BL研究の軌跡

BLに関する日本国内外の研究において、腐女子の主体的な欲望——彼女らはどうして、どのように男同士の親密関係を「妄想」するのか——は最も核心的な研究関心とさ

1 「腐女子」とは男同士の親密関係を扱う作品が好きな女性ファンの自虐的な自称である。

れてきた。少女マンガの領域において、女性が男の体を語る主体として可視化され始めたのは、「花の24年組」²と呼ばれるマンガ家による「少年愛」サブジャンルにおいてであった。70年代から80年代にかけて、繊細な身体を持つ美少年同士の官能的な性愛関係を描写する耽美な少年愛は、多くの女性読者を魅了してきた（水間 2005; 石田 2008）。「少年愛」は後に「やおい」（「ヤマなし、オチなし、イミなし」の頭文字を取って作られた造語）という主に男同士の性愛関係を描写するジャンルに発展する（石田 2008; 榊原 1998）。90年代以降、「ボーイズラブ」というジャンルの定着とともに、男同士の親密関係に関する物語の多様化とメディアミックスも進んでいった。男同士の親密関係がフォーカスされ、女性キャラクターの存在が希薄化（もしくは不在）になっているというBLの構造の中で、作り手と読み手の女性は初めて「男を見る主体」としての立場を獲得する（藤本 2007; 上野 2007）。このような腐女子の主体的欲望は、BLのコンテンツの多様化とともに可視化されつつある。

では、「男を見る主体」の立場を獲得した腐女子は、何を見ているのだろうか。これまでの先行研究においては、男同士の親密関係に向ける腐女子の眼差しが焦点とな

り、男同士の関係性が意味することを解明するという流れで議論が展開されてきた。たとえば、上野千鶴子（2002）によると、同じ性別の身体を持つ男同士は、「異質だが対等」な関係性を表し、腐女子を従属的なジェンダー構造から解放させ、自分を妄想の対象に置き換えずに妄想する空間を保ってくれる「安全装置」の意味を持つ。また、男同士の身体は妊娠出産と無縁³なので、女性を強制的な母性のジェンダー規範から解放する役割を果たす、という指摘も挙げられる（金田 2007; 溝口 2015）。

このように、腐女子の主な関心は男同士の関係性にあるので、たとえば、堀あきこ（2019）は肉体的、社会状況、精神的側面をめぐる「攻め」と「受け」⁴の可変的な権力関係から、BLの恋愛関係における力の拮抗とバランスを説明している。さらに、あらゆる男同士の関係性を同性愛的な親密関係に読み替えるという二次創作の文脈を含め、男同士の親密関係を「見る」、「解釈する」ことにより、新たな作品の楽しみ方が開拓されるだけでなく、腐女子という「妄想の共同体」が形成される（東 2010）。

以上のように、BLは女性の主体性と集合意識の獲得、及びジェンダー規範からの解放において「進化的な」（溝口 2015）役割を果たすとされている。男同士の関係

2 萩尾望都、竹宮恵子、大島弓子、山岸涼子などは、1970年代に多くの少年愛名作を生み出した「花の24年組」の代表的なマンガ家として挙げられる。

3 後述するように、男性キャラクターが妊娠・出産するという設定のBLもあるが、一般的には、BLの男性キャラクターは妊娠できない体となっている、と考えて妥当だと思われる。

4 BLの中で、男同士の親密関係は「攻め×受け」と表記されている。「攻め」が比較的マスキュリン／能動的／支配的な役割であるのに対して、「受け」は比較的フェミニン／受動的／従属的な役割である。とりわけ性的場面においては、攻めが挿入する側、受けが挿入される側とされている。

性の描写に関する分析が進んでいく中で、BLと異性愛中心主義の構造との対峙関係をめぐる議論が展開している。まず、少年愛とBLのキャラクターの造形の変化は注目に値する。BLの攻めと受けのキャラクターと比べて、少年愛作品に描かれる中性的（もしくは「両性具有的」）な美少年の方がよりファンタジー性が高いが、そのファンタジックな造形とキャラクターのモノローグにより、描き手と読み手の女性は自らの心情を寄託するという読み方が提示される。一方、BLにはマスキュリンな攻めとフェミニンな受けの二極分化が見られ、この二極分化は従来のジェンダー規範を強化・再生産してしまうという指摘もある（藤本 2007; 守 2010）。また、現実とかけ離れたファンタジックなキャラクター造形は、ゲイの当事者への誤解や偏見を招くという批判もある（石川 2009; 堀 2010）。

男性キャラクターの関係性への腐女子のこだわりは、特に性的描写に特化したBL作品⁵において明白に示される。こうした作品には、攻めが挿入し、受けが挿入されると明確に役割が分かれるという点に異性愛のジェンダー構造を踏襲する部分はあるものの、性的客体のキャラクター（＝受け）の身体に特化して描写されるわけではない。関係性の重視というBLの基盤に基づき、性的描写に特化した作品においてもキャラクターの属性と関係性の設定が細かく描写されるので、キャラクターが「物化」されることが回避できる。これは女性の身体が断

片化して描写される男性向けのポルノとの最大の違いと指摘されている（堀 2020）。また、BLにおける性暴力もフェミニズムの視点の下で争点とされてきた。一方では、様々な脱暴力の仕掛けがBLに仕込まれているからといって、性による支配、または「愛ゆえのレイプ（溝口 2015）」という性暴力の神話などのジェンダー構造の影響を看過できない。他方では、女性が性暴力をめぐる欲望を抱くという点に対するラディカルな解釈もある。たとえば、男性キャラクターに性暴力を受けさせることを「男性ジェンダー規範に亀裂をもたらす」（堀 2020: 146）とし、女性が「社会から眉をひそめられるような欲望」（堀 2020: 148）を抱くことの意義を見いだすという捉え方が挙げられる。すなわち、BLにおける性及び性暴力の描写はタブー視される女性の欲望を可視化するだけでない。そうした描写は性をめぐるジェンダーの権力関係とその自明性を男同士の身体を通して表現することにより、顕在化させながら脱構築を試みる装置として捉えられよう。

腐女子の眼差しはマンガ、アニメなど「2次元」のジャンルにとどまらず、アイドルや俳優といった「3次元」（陳 2014; 西原 2020）、または声優、舞台、ミュージカルといった「2.5次元」（田中 2018）、さらには女性のみが演じる宝塚歌劇団（東 2015）も、男同士の親密関係の解釈ゲームが愉しめる題材となっている。こうしたジャンルをめぐる腐女子のファンタジーの構築はさらに

5 性的描写に特化する作品には、性行為における攻めと受けの役割を明確に表現するために、性器の挿入シーンが詳しく描かれることは珍しくない。しかし、すべてのBL作品に必ず性的場面が含まれるわけではなく、攻めと受けも性行為の役割のみによって分けられるのではない、という点を改めて強調したい。

ダイナミックで複雑になる。1つ目に、たとえばアイドルグループの中で強く示される上下関係や友情は腐女子の萌え要素と捉えられるが、事務所や演出者、または腐女子でない一般のファンに迷惑をかけないように、腐女子は隠語の使用などでBLの妄想を自重する(陳 2014; 西原 2020)。2つ目に、公共の場におけるBLの妄想に対する規制があるものの、こうしたメディアコンテンツを受容、要請するのは女性ファンなので、彼女らがアンダーグラウンドの形で妄想を絶えず生産することにより、「強靱に思われる男性主体のホモソーシャルにいくらかのほころびを生じさせ」(西原 2020: 183)、異性愛中心主義の構造を揺るがすきっかけを生み出し続けると捉えられる。3つ目に、生身の人間による演出が2次元作品によりリアルな感じを持たせるのは、キャラクターの造形がより立体的になるだけでなく、ファンタジーは現実と交差して人間の身体によって現前化されるからと考えられる。生身の男性に向ける腐女子の眼差しに焦点を当てる研究にはまだ十分な蓄積があるとは言い難く、この点をめぐって議論を深める必要があると考える⁶。

もちろん、BLを愛好するのは腐女子だけではなく、「腐男子」(BLが好きな男性)やゲイの読者もいる。たとえば、BL好きのお笑い芸人・サンキュータツオと映画評論家・春日太一は対談において、男性キャラクターの人間性と関係性の描写などBLの魅力について語っていたが、男性キャラクターの

身体や性的場面の描写への自己同一化に抵抗する傾向にも言及している(サンキュータツオ・春日太一 2016)。一方、前にも触れたが、90年代において、男性同性愛の過剰な美化やゲイの現実と乖離した描写により、BL・やおいはゲイの表象の横奪、ゲイ差別ではないかという「やおい論争」(堀 2010)が起きたが、BLの多様化につれ、ゲイのリアリティに接近するようになりつつあるため、ゲイ・コミュニティにおけるBLの受容も広がっていく(前川 2020)。この「リアリティ」はゲイ・コミックにおける男性の身体や性的場面のリアルな描写と違い、自然に表現されている男同士の恋愛関係に、ゲイ男性の読者がリアリティを感じ取り、自己同一化しやすい、ということの意味する(前川 2020)。これら男性のBLとの関わり方と比べると、「男」「同士」の「関係性」の三者をめぐってファンタジーを構築するという腐女子の眼差しの特徴が明確になる。

以上のように、「腐女子の眼差し」を軸にこれまでのBL研究を検討すると、フィクションとしてのBLを女性たちのファンタジーを具現化する装置として捉えるという共通点が浮き彫りになった。そこで、フィクションと現実の関係性を精緻に再考しなければならない。女性の主体性を読み解こうとするフェミニズムの立場にしろ、異性愛中心主義を攪乱する可能性を見出そうとするクィア研究の立場にしろ、いずれもBLから現実のジェンダー構造を揺るがす可能性

6 「生身の男性の身体」に関する議論は、「BLファンタジー」をめぐり理論構築を目指す本稿の趣旨を超えるため割愛するが、本稿の議論を踏まえ、「生身の男性の身体」をめぐり腐女子のファンタジーをより精緻に分析することを今後の課題としたい。

を探るための議論ではあるが、この試みはファンタジーと表象の次元にとどまっているように思われる。すなわち、ファンタジーと現実が複雑に絡み合っているBLを、女性たちの欲望が投影され、まだ実現されていない何か具現化される場と捉えられるなら、女性たちが欲望する現実の「一歩先」の地点はどこに着地するのだろうか、その場の着地点でどのような景色が見えるのだろうか。そこで、BLにおける欲望、ファンタジーと現実の関係性を総合的に分析する必要が浮上する。BLをファンタジーと現実が交差し、女性の欲望を具現化する場として捉える理論を構築するために、欲望、ファンタジーと現実の関係性を論じてきた精神分析からヒントを探り、それをめぐるフェミニズムの議論で考察していく。

Ⅲ. BLにおけるファンタジーの構造

1. ラカンの精神分析とBL

ゲイル・ルビン (Gayle Rubin 1975)、ジュディス・バトラー (Judith Butler 1989=1999)、ジョン・スコット (Joan Scott 2011)、など多くのフェミニストはフロイトやラカンの精神分析の議論との対話と批判を通じて、ジェンダー・セクシュアリティ研究の理論構築を試みた。フェミニストたちは構造的な性差、男女の支配—従属関係を解釈しつつ、精神分析における男根中心主義の反論を通じて、あらゆる女性に対する抑圧を脱構築しようとしてきた。その中で、とりわけ女性が欲望の客体とされてきたジェンダー構造への批判、女性の欲望の分析は重要な課題となっている。ここでは、こうしたフェミニズムの議論を用いてBLにおける欲望、

ファンタジー、現実の関係性を論じる前に、まずはその土台となるラカンの精神分析を改めて検討しておこう。

ラカンの精神分析は「鏡像段階論」から始まると言えよう。彼は人間のアイデンティティ形成プロセスについて、フロイトのエディプス・コンプレックスを継承しながら、独自の論点を展開していく。鏡像は子供の自我の形成過程において重要な基盤となる。子供が初めて自分が母親に抱かれる姿を見る時に、これまで諸感覚によってしか寄せ集められなかった分断した自己のイメージの統合が始まる。鏡の中に映っている自分のイメージと、様々な他者との接触経験によって認識された自分のイメージは、あくまでも自分の外部にあるイメージに過ぎない。つまり、人間は自我の外部のイメージに自分を同一化し、自分のアイデンティティを作り上げていくのである。ラカンはこうしたイメージの構造を「想像界」と呼ぶ (新宮 1995; 向井 2016)。

そして、子供は鏡像を通じて、自分を抱いている母親という絶対的他者の存在を認識することになる。子供の自己形成も絶対的他者の承認によって保証されるので、それは人間を支配する法の世界となる。ラカンはこの世界を「象徴界」と呼ぶ。象徴界とは普遍的かつ純粋な構造であり、この構造の秩序を支配する象徴は言語である。人間は他者のイメージへの同一化を通じて自我を形成すると同時に、自我の根源的な象徴も探求しようとする。しかし、言語を獲得して自我を象徴化する過程において、自我を消去することも余儀なくされる。ここにエディプス・コンプレックスにおける「去

勢」との接点が見られる。フロイトによると、エディプス・コンプレックスにおいて、子供（ここで想定されるのはあくまでも男児）は母親への欲望を断念し、父親と同一化することで、男性のジェンダーアイデンティティを形成していくわけだが、ラカンの文脈においては、子供はペニスの象徴＝ファルスを作り出すことによって、母親が欲望する父親と同一化するのである。ラカンはファルスがあらゆる言語の根源において特権的な存在とし、ファルスという象徴の獲得は言語の獲得でもあるとしている。しかし、この象徴の獲得は実在のモノの放棄（＝去勢）をも意味する。したがって、子供は去勢という対価を払い、言語を獲得することで、人間のアイデンティティを手に入れるのである（新宮 1995; 向井 2016）。

最後に残っている現実界は象徴界とも想像界とも違い、言語によって把握しきれず、接近もできない次元である。それにもかかわらず、現実界に接近しようとする動きは常にある。このように、現実界は接近と不可能の反復の中で位置づけられており、そこに世界の体系をうまく機能させる可能性が提示されている（新宮 1995; ライト 2001 = 2005）。

次に、ラカンの文脈における「欲望」について見ておこう。ラカンによると、欲望は満足できる本能的な欲求と違い、満足できないものである。そして、欲望は他者の承認によって意味を持つとされるので、欲望は常に「他者の欲望」であるといえる。我々は言語化を通じて欲望を獲得するが、その欲望の対象を掴むことができないが故に、満足することもできない。そこで、欲望の対象

として現前するものを、ラカンは「対象 a 」と呼ぶ。対象 a はまた「小文字の他者」とも呼ばれる。象徴界を指す「大文字の他者」とは対照的で、「小文字の他者」としての対象 a は、自我と密接するものであり、そこに様々な幻想が投影される。我々の欲望の対象として対象 a が現前するのも、この理由である。一方、対象 a は常に「余剰」であり、欲望の原因でもある。というのも、欲望は求められ続けても充足できないため、その求めきれない部分、つまり「余剰」が常に残っている。この余剰はさらに我々の欲望を掻き立てるので、欲望の原因にもなるのである（新宮 1995; 向井 2016）。

上記のように概観したラカンの重要な論点を、どのように BL ファンタジーの理論化に応用すれば良いだろうか。まず、BLにおいて、男同士の親密関係をめぐるファンタジーはいわば「お約束」または「型」（溝口 2017）など、一定のロジックに基づいて構成される。このロジックは BL ファンタジーの「文法」であり、BL という世界を支える法である。ラカンの文脈に当てはめると、ファンタジーの構造は「象徴界」に該当する。次に、様々な題材、媒体の BL 作品に描かれる男同士の関係性はこのファンタジーの構造を具現化するイメージである。つまり、ラカンの言う「想像界」に該当する。そして、BL はそもそもフィクションであり、作り手も受け手も絶えず妄想することを通じて、この触れられないフィクションの世界に接近しようとする。よって、このフィクションの性質は「現実界」として捉えられる。

以上のように、BL のファンタジーをラカ

ンの論点で構造化してみたが、腐女子の欲望、彼女らの眼差しをどのように解釈すれば良いだろうか。前節で検討したように、BLの中には、ジェンダー規範における女性への支配と抑圧を脱構築する希望が寄託されている、という先行研究の指摘がある。ジェンダー規範からの解放という欲望はまだ実現できていないため、腐女子はBLを描き／読み続ける。この欲望の対象として現前するのは、ジェンダー構造の抑圧と支配から脱却するユートピアであり、腐女子の欲望を引き起こし続ける要因でもある。つまり、このユートピアは腐女子の欲望の「対象a」として捉えられるのである。

以上の議論を通して、BLファンタジーを構造化し、この構造の「法」を理論化する土台が整えられる。しかし、男同士の親密関係をめぐるこの妄想の「法」は一見して定着したと思われるが、少年愛からBLまでのキャラクターの造形や関係性の描き方の変容からもわかるように、この「法」は完全に腐女子を外在する不動かつ自律的な構造ではない。むしろ、それは可変的だからこそ、BLコンテンツの多様化とその受容の拡大が可能になる。続いては、ラカンの論点をめぐるフェミニズムの批評を取り上げ、BLファンタジーの構造の絶対性や不変性を問い直す。

2. BLファンタジーという構造

フェミニストたちがすでに批判しているように（バトラー 1989=1999）、象徴界を「父の法」という絶対的存在と位置づけるラカンの捉え方では、ファルス中心主義による非対称的なジェンダー関係が露呈す

るだけでなく、この構造はまるで「前一言説的」に存在しているかのように自明的である。まず、象徴界の自明性と不変性を批判的な視点で捉えつつ、BLファンタジーの構造を再考するために、バトラー（1989=1999）とスコット（2011）の論点を検討する。バトラー（1989=1999）は『ジェンダー・トラブル』の中で、女というカテゴリーが「首尾一貫した安定した主体」（p.25）として構築されたジェンダー構造を批判し、その統一性は異性愛中心主義の中で規制された実践の反復と沈殿の結果に過ぎないと指摘している。バトラーがジェンダー構造はパフォーマティブに形成されると主張するのは、ジェンダーは厳密に規制された実践が繰り返され、長い年月の間に凝固した結果と捉えるからである。しかし、ジェンダーの首尾一貫性を批判しているバトラーは、ジェンダーをめぐる実践は単純に繰り返されるだけでなく、その反復の過程に模倣、パロディーや失敗が伴うということも主張している。すなわち、バトラーはジェンダーが反復を通じて重層的に沈殿していった構造とし、このプロセスからこぼれ落ちるものがジェンダー構造の攪乱の契機になりうると捉える。

一方、女というカテゴリーは主体の存在に先行するという文化構築論の観点を批判し、このカテゴリーの構築過程の不安定性を指摘しているスコット（2011）は、バトラーと類似した立場を取ると言えよう。しかし、バトラーが精神分析論を批判しつつ論点を展開していったのに対し、歴史学者であるスコットは、むしろ精神分析論から得た知見を女性史研究に応用することを試

みた。スコットは構造と主体を二項対立の図式と捉える従来のジェンダー観を批判し、精神分析論の中のファンタジーという概念に注目する。夢や空想に織り込まれるファンタジーは、一見するとバラバラな要素が矛盾のない配列で再編成されているが、実際には首尾一貫したものではない。この論点に即して、スコットは次のように指摘している。スコットによると、女というカテゴリーが首尾一貫の連続体であるという捉え方はファンタジーに過ぎず、むしろ、このカテゴリーの形成過程はまさにファンタジーのように、様々な要素が偶然かつ不安定の中で、首尾一貫に見える形に構造化されていったのである。すなわち、時代背景、社会文脈、個人史など様々な差異、及び女性間の不連続性は、最大公約数的な女というカテゴリーに収斂される。しかし、この収斂の過程には必然性もなければ、女というカテゴリーが不動のものとも言えない。スコットはこのカテゴリーの形成過程を「反響 (echo)」というメタファーで捉え、歴史の出来事の不完全な複製と継承を通じて形成されていくのだと指摘している。すなわち、女性をめぐる様々な出来事は歴史の時間軸の違うところに位置するが、女というカテゴリーが歴史的に構築され続けたのは、個別の女性の存在が単に蓄積されたからではない。それらの差異が最小限に抑えられ、共通点のみが引き継がれ、繰り返され続けるからである。そして、歴史学者であるスコットは、女性史を書くことを通じて、女性をめぐる重要な出来事や共通点が選択、伝承され、女というカテゴリーが反響のように形成されてい

くと指摘し、歴史学者のフェミニストにこの過程への参入を呼びかけている。

以上のように、スコットもバトラーと同様に、カテゴリーの形成過程の反復、偶然性と可変性を重視していることがわかる。しかし、バトラーの視点では、ジェンダーは反復やパロディーが凝固、沈殿する結果とされるが、スコットが用いる反響というメタファーでは、ジェンダーがエコーのように、徐々に彼方へと伝わっていき、完全に消失するわけでもなく、終点も見えないというイメージを持っている。言い換えれば、両方とも系譜学のアプローチの必要性を訴えつつ、バトラーがジェンダーの構造化の軌跡を遡るのに対し、スコットはこの構造を終わりのないプロセスと捉える姿勢を示す。

バトラーとスコットの議論を踏まえて、前節でラカンの「象徴界—想像界—現実界」の枠組みを参照して論じたBLファンタジーの構造は、次のように精緻化できる。少年愛からBLまで、腐女子は様々な妄想を通じて、このフィクションの世界に接近しようとしてきた。フィクションの世界に触れることは不可能なので、次頁の図1には緩めの波線のフレームでそのぼんやりとしたイメージを表現している。この世界を維持する男同士の親密関係をめぐる妄想という「法」(=象徴界)は、多様な形の作品(=想像界)において、様々な「萌え要素」で具現化される。しかし、この「法」は一定の型が維持されているものの、絶対的かつ揺るぎない構造ではない。萌え要素がファンタジーの欠片のように、互いに共鳴しながら模倣、反復していくこの過程の中で、ズレや失敗なども生じうるので、BL

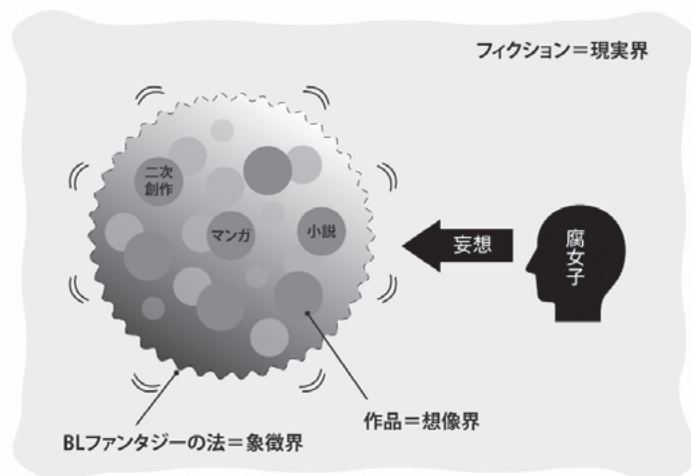


図1 BLファンタジーの構造（筆者考案、張瑋芸に作成を依頼）

ファンタジーも硬直した構造ではなく、不規則かつ可変的なものである。図1のように、この不規則性を突起のある球体のイメージで表現し、可変性を点線の枠と外側が跳ねるイメージで表現している。そうした意外な結果こそ、BLファンタジーを「進化」させ続ける重要な動力である。

以上のように、BLファンタジーを構造化してみたが、BLファンタジーはなぜ「男」「同士」において現前するのか、つまり、「男」「同士」の必然性は何だろうか、というBLファンタジーの根本的な部分を掘り下げたい。男性キャラクターそのものをファンタジーが現前する場として捉えられるならば、そこに、このファンタジーと異性愛中心主義のジェンダー構造との複雑な関係性も反映されると考えられる。次節では、BLにおける「男」「同士」の身体に焦点を当て、ファンタジーにおける身体の

役割を論じる。

IV. BLにおける意義のある諸身体 (Bodies that matter in BL⁷)

1. ラディカルな男性キャラクターの身体

言うまでもなく、腐女子は「攻め×受け」の関係性のみをめぐって妄想するわけではない。男性キャラクターたちは腐女子のファンタジーを具現化する装置として描かれ、語られるので、腐女子の言説はキャラクターの外見やセックスシーンの体勢などをめぐっても展開している。たとえば、研究者の金田とライターの本山は対談の中で、受けのすね毛や尻毛を描いた作品に対して、萌えの表現や選択肢の開拓と評価している⁸。さらに、マンガ作者の創作過程を見ると、彼女らがどのように男性の身体好みや理想的なイメージを絵に具現化させるかが明確にわかる。マンガ家の雲田はる

7 本節のタイトルはジュディス・パトラー (2011) *Bodies that matter* からヒントを得た。元々の英語タイトルは言葉の遊びであり、日本語に訳すとその遊びの部分が反映されにくいいため、英語タイトルも付けている。

8 「萌える座談会」(金田淳子×福田里香×山本文子)より。(『美術手帖』2014年12月号:69-77。)

こが描いた下着のみ着用の男性数名が並んでいるチャートは、それぞれの男性キャラクターの身長、体や髪型の特徴、すね毛の生え方などが詳しく描かれている⁹。また、マンガ家の宝井理人¹⁰はインタビューにおいて、キャラクターの指や筋肉へのこだわりを語っており、この記事には、2枚の絵が掲載されている。一つは、彼女が特注した人体模型を使ってマンガを描いている姿が映っている写真である。もう一つは彼女のマンガの男性キャラクターである。彼のシャツが開いており、胸と腹部の筋肉のラインが鮮明に描かれており、その下には「美しく、麗しく、妖艶」という記事のタイトルがついている。男性性と女性性が混合されて男性キャラクターの身体に現れるということは、彼女のインタビューと絵柄から読み取れる。また、マンガ家のスカーレット・ベリ子は研究者の溝口彰子との対談において、男性の筋肉へのこだわりを表現するために、ゲイ向けのアダルト・ビデオを参考にしてると述べながら、BLのキャラクターに仕上げるためには「男の色気、艶っぽさ」（溝口 2017: 205）を表現するように意識していると強調している。さらに、ゲイ・コミックと比べると、BLの男性キャラクターの造形の特徴が明らかになる。たとえば、ゲイ・コミック作家の田亀源五郎の作品には、キャラクターの筋肉が大きく、体毛が濃く、顎が四角いといった特徴が見られる¹¹。それに対し、BLのキャ

ラクターは相対的に見て華奢で繊細な造形になっている。こうしたBLの男性キャラクターの造形を見てみると、BLのキャラクターはリアルな男性身体の描写というよりも、むしろ松井が指摘する「女性が描く男性への擬態」（松井 2014: 137）と言えるだろう。

こうした擬態は「攻め×受け」の関係性にも反映されている。前述した「やおい論争」におけるゲイ当事者の批判にもあったように、「攻め×受け」は男同士の同性愛的関係ではあるが、現実の男性同性愛（＝ゲイ）を忠実に反映するものとは言いがたい。では、なぜゲイと異なる形の「攻め×受け」でなければならないのか。すなわち、「攻め×受け」の関係性は何を、どのように擬態するのか、この擬態は何を意味するのか。続いては、「攻め×受け」という形に焦点を当て、バトラーの論点を取り上げて考察してみたい。

バトラー（1989=1999）は反復、パロディーなどを通じて、異性愛中心主義の構造が維持されると指摘している。この過程において、全てが完璧に複製されるわけではなく、予想外の結果も生まれるし、むしろこの過程を通じて、異性愛中心主義も自分自身の絶え間ない複製とパロディーに過ぎないということが暴露される。この論点を踏まえて、「攻め×受け」と異性愛中心主義の関係性を見てみよう。「攻め×受け」の関係性には二項対立のジェンダー関係やホ

9 雲田はこのインタビューより。（『美術手帖』2014年12月号: 21-27。聞き手・文：ヤマダトモコ。）

10 宝井理人のインタビューより。（『美術手帖』2014年12月号: 90-95。聞き手・文：平松梨沙。）

11 田亀源五郎のインタビューより。（『美術手帖』2014年12月号: 114-119。聞き手・文：エスマラルダ。）

モフォビアなど、異性愛中心主義の影響が内面化される部分があることは否めないものの（石田 2008; 堀 2010）、実際にそれと異性愛中心主義の構造の関係性は単なる複製や再生産より複雑なはずと考える。むしろ、「攻め×受け」は異性愛と同性愛を模倣しながら、少しずらしたパロディーとして生まれた意外な結果、という捉え方のほうが適切ではないだろうか。

このパロディーと意外性は男性キャラクターの表現、とりわけ受けの造形から窺える。多くの場合、攻めと比べて、受けのほうが背が低く、目が大きく、体が華奢で、性関係において受動的など女性的な要素が多い（西原 2013）。しかし、なぜ受けは女性っぽく描かれるのだろうか。女性的要素を取り入れることで、女性たちが感情移入しやすいとも考えられるが、ここでは、精神分析論のフェミニズム批判によく言及される「仮装」という概念で解釈してみたい。「仮装」は一種の隠蔽である。バトラー（1989=1999）の文脈におけば、女はファルスであり、絶対的女性というものは存在しない、ということの隠蔽するための仮装である。また、エリザベス・ライト（Elizabeth Wright 2001=2005）は別の角度から女性性の「仮装」を説明している。彼女は「フィルムノワール」というジャンルの映画を挙げ、それは一見して男性的な視線に支配されると捉えられているが、実は「脱構築的に楽しめる女性の観客に提供された能動的な場になりうる」（ライト 2001=2005: 62）と主張する。その理由は、いわゆる「悪女」とされる

役が自分の女性性の魅力を利用して男を虜にするということ、社会的に構築された女性性がいかに根深く叩き込まれているかという仮装の問題が縮図的に示されるからである。このように、「仮装」は一見してジェンダー構造における女性の従属性を強化するように見えるが、ジャクリーン・ローズ（Jacqueline Rose 2006）は「仮装」の政治性を次のように訴えている。女性はいつも政治的に正しいジェンダー観を持っているわけでもなければ、常にジェンダーの政治性を明確に意識しているわけでもない。しかし、それは「女性性を仮装した女性」が従属的な立場を無批判に甘受していることを意味するわけでもない。仮装のヴェールに隠される無意識の次元には、ジェンダー構造への異議申し立ての政治的な渴望が隠れているかもしれないからである。

このような論点に従えば、受けをジェンダー構造における、ある種の「仮装」として捉えることもできるだろう。すなわち、ペニスを持つ男の身体に女性的な要素が盛り込まれ、従属的な属性で描写される受けは、女性への抑圧と支配のジェンダー構造の受け皿であり、その男の身体はこの権力構造を隠蔽する仮装として捉えられるのではないだろうか。

BLの男性キャラクターの身体をめぐる、さらにラディカルに解釈できるケースがある。たとえば、一部の作品では、男性キャラクター（特に受け）が妊娠する設定¹²になっている。これを母性の回復と捉えることもできるが、男性の身体を経由して母

12 これは「オメガバース」というジャンルである。オメガバースは北米のファンフィクションに由来

性が表現されるという点から見ると、身体と母性の関係性をより精緻に考え直す必要がある。バトラー(1989=1999)は女性の身体をめぐる、クリステヴァとフーコーの論点を検討している。クリステヴァは母の身体は「前一言説的なもの」、つまり原始的な欲望として存在すると主張するが、フーコーはこの考え方に対して、母の身体の神聖化は、母性を女性の本質と規定する特定のセクシュアリティの制度の結果に過ぎないと批判している。この2つの論点を参照しながらBLにおける男性キャラクターの妊娠を考えると、たとえ「前一言説的な」身体が存在するとしても、それを女の身体に依拠することへの拒否により、男性キャラクターが代わりに生殖の機能を担うものになると捉えられる。さらにいうと、妊娠する男性キャラクターは女でも男でもない、母性や生殖から完全に切り離される身体である。そのような概念を表す男性キャラクターが妊娠する身体であることは、母性や生殖と女の身体の必然性へのラディカルな否定を意味するのではないだろうか。

2. 男性キャラクターの身体にみる異性愛中心主義の首尾(不)一貫性

以上のように、攻めと受けの身体に着目することにより、ジェンダーと身体の統一性の自明性を問い直すことになる。バ

トラー(1989=1999)は、身体、セックス、ジェンダーの首尾一貫した関係性について、ボーヴォワールとウイティッグの論点を挙げている。一方では、バトラーはボーヴォワールの「ひとは女に生まれず、女になる」という主張を踏まえ、セックスとジェンダーが首尾一貫する必然性を問うている。バトラーが「セックスとジェンダーが根本的に別々のものならば、所与のセックスであることは所与のジェンダーになることではない」(バトラー 1989=1999: 200-1)と示唆するように、ジェンダーが性別化された身体によって規定されるものであれば、そもそも身体はセックスとジェンダーの首尾一貫性を固定させる場として捉えられる。他方では、バトラーが引用するウイティッグの「レズビアン身体」の論点において、セックスは「そもそも不連続な属性の塊であるものに、人工的な統一を押し付けているもの」(バトラー 1989=1999: 205)であり、とりわけセックスと関連する身体部位をペニスや膣などいわゆる身体の性感帯に限定することによって、身体が断片化されてしまう、という指摘がなされている。つまり、バトラーは性別化された身体に首尾一貫性を要求するというジェンダー規範を問題視しているのである。

このようなバトラーの指摘を踏まえ、BLの男性キャラクターの身体を考察すると、

すると言われており、日本語圏では2013-14年頃から二次創作に利用され、2015年頃からは商業BLにおいても導入されるようになる。オメガバースにおいて、男性と女性にそれぞれ α (アルファ)、 β (ベータ)、 Ω (オメガ)という3つの性区分が設定され、計6種類の性が存在する。 β は最も数の多い中間階層で、 α は「産ませる」質を持っているため、高い社会的地位を持っている。「産む性」の特質を持つ Ω は発情期があり、社会的地位が最も低いとされている(高島2020)。オメガバースがBLに導入されると、「産む性」としての Ω は「妊娠する男性」となる。

身体的首尾一貫性を強要するジェンダー規範、及びこの規範のゆらぎが垣間見える。たとえば、マンガの性的場面におけるペニスや乳首などの身体部位の描写や、射精時の表情と体液の強調は、「男」というジェンダー化された身体的首尾一貫性を示唆する。それに対して、どのようにフェミニンな受けでもペニスと射精の描写が欠かせないことや、妊娠する男性キャラクターの存在は、逆にセックスとジェンダーの首尾一貫性の揺らぎを示す。この考察から見ると、BLの男性キャラクターの身体は、まさに身体、セックス、ジェンダーの首尾一貫性を強要するジェンダー構造を暴く装置として捉えられるのではないだろうか。

最後に、「攻め×受け」の関係性を包摂する「男同士の親密関係」の次元を検討する。バトラー(1989=1999)は法は常に禁止と生産の機能を同時に果たしているというフーコーの論点を参照しつつ、異性愛中心主義の法をめぐる議論を次のように展開している。異性愛中心主義の法は、認められるセクシュアリティ(=異性愛)を規定し、認められないセクシュアリティ(同性愛など異性愛でないセクシュアリティ)を禁止する。しかし、認められないセクシュアリティを禁止するためには、そういう禁止されるべきセクシュアリティを生産しなければならない。すなわち、異性愛中心主義の強制力と合法性を維持するためには、同性愛を生産して抑圧することが不可欠である。よって、一方では、BLの男同士の親密関係は従来の少女マンガにおける女性に抑圧的な異性愛中心主義からずらすための装置とされるが、その反面、BLへの抑圧に

より、それが対抗しようとする異性愛中心主義の法が強化されることになる。他方では、繰り返しになるが、BLに描かれた「攻め×受け」の関係性は異性愛と同性愛の模倣とパロディーの中で生まれた意外な結果として捉えられる。BLはこうして、異性愛中心主義が自身の維持のために禁止と模倣を必要とするほど自明的ではない、ということを暴く役割を果たしている。

上記の議論を通して、「男」「同士」の「関係性」をめぐるBLファンタジーにおける身体的重要性が見られる。繰り返しになるが、「攻め×受け」という関係性は、女性の欲望を可視化し、女性が完全なる「見る主体」の立場を確保するための安全装置の役割を果たす(藤本 2007; 上野 2007)。そして、この関係性は男同士の姿を通して表現されるが、それは、性別化された身体的首尾一貫性の強要、及び同性愛関係の禁止によってしか維持されえない異性愛中心主義の構造のほころびを示すためには、男同士の身体が必要となるからである。とりわけBLが2次元作品に限定するものでなくなった今日において、BLファンタジーにおける男性の身体の自明性を問い直すことは重要ではないだろうか。たとえば、近年増えつつあるBLマンガの実写映画やドラマの場合、生身の男性の身体により原作の攻めや受けを再現するためには、髪型、服装、メイクなど外見の役作りが重要である。BLマンガの攻めと受けが生物学的な男性身体のパロディーであるならば、それらを再現するキャストたちは、パロディーのパロディーとも言えよう。キャストたちが演技、役作りを通して2次元キャラク

ターの特徴を刻みこんだ生身の身体はキャラクターのパロディーであるし、彼らが再現した「攻め×受け」の関係性も男性同性愛のパロディーである。それらが現実世界に現れることによって、身体、セックス、ジェンダー、セクシュアリティの首尾一貫性を要求する異性愛中心主義の強固さとゆらぎが露呈するのである。

V. おわりに

BL マンガの実写ドラマ『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』（通称「チェリまほ」）の人気ぶりが日本のみならず、海外でも注目されていた。実写ドラマが原作者も絶賛するほど多くの腐女子の心を掴み、さらに実写版の描写と展開をめぐる議論を生み出している¹³という反響を見ると、BL ファンタジーはどのように具現化されているか、ということが重要な点になるだろう。腐女子の脳内にしか存在し得ない、男同士の親密関係をめぐるファンタジーは、数々のBL 作品を通して具現化されている。腐女子は男同士の親密関係に何を託してきたのか、彼女の眼差しが向けている攻めと受けをどう捉えれば良いだろうか。これまでの先行研究において、これらの問題を具体的な事例分析を通じて議論するものが多いが、包括的に議論するための理論構築はまだ確立しているとは言い難い。本稿では、精神分析論とフェミニズムの議論を基に、BL ファンタジーの構造を包摂する論点を、異性愛中心主義に位置づ

けて構築することを試みた。ラカンの精神分析論から得た知見は、次のようにBL ファンタジーの構造化に応用できる。腐女子は数々の作品（＝想像界）を描くことで、BL ファンタジーの法則という抽象的な構造（＝象徴界）を具現化しようとしている。そして、彼女らは男同士の関係性に「萌える」ことで、BL というフィクションの世界（＝現実界）に接近しようとし続ける。作品に描かれる男同士の親密関係には、女性の従属的、抑圧的な位置から解放されるユートピアに接近したいという欲望（＝対象a）が投影される。そこには必ずしも政治的に正しいジェンダー平等の世界が描かれているとは限らないが、抑圧からの解放というユートピアへの想像は、腐女子にファンタジーを構築させ続けるのである。

多くの先行研究では、BL は異性愛中心主義のジェンダー構造に対して転覆や攪乱の力を持っていると論じられているが、BL と異性愛中心主義が拮抗する動態的關係は十分に論じられているとは言い難い。この議論を深めるためには、攻めと受けの身体の造形への着目が重要だと主張したい。すなわち、腐女子たちの無数の妄想の反復と共鳴を通じて、BL ファンタジーは凝固されながらも、少しずつ変容・拡張していく。このファンタジーが「攻め」と「受け」の身体で表現されることを、異性愛中心主義の模倣、引用、パロディーから生じた意外な結果と捉えることで、異性愛中心主義という構造自体も絶え間ない自分自身の反

13 本ドラマの脚本家・吉田恵里香が評論家・横川良明との対談の中で、BL の捉え方や原作中の腐女子キャラクターの設定変更について語ったことがきっかけに、BL への偏見や周縁化の問題をめぐる議論が醸し出されている。(https://mi-mollet.com/articles/-/27045 https://mi-mollet.com/articles/-/27046 2021/01/13 アクセス)

復とパロディーの結果（バトラーの言葉ではこの結果は「喜劇」とも捉えられる）ということが暴かれるのである。こうした観点からBLの持つ異性愛中心主義に対する転覆や攪乱の効果を見出すことこそ、BLを「クィアする（queering）」姿勢を示していることになるのではないだろうか。

また、実写ドラマや映画の増加により、BLは腐女子の限界を超えて、より多くの人々に触れられるようになりつつある中で、「クィアする」姿勢はさらに重要になる。実写化を通じて、BLファンタジーが異性愛中心主義の隙間をすり抜けて具現化される場合もあるが、ホモフォビアが原因で具現化できず、犠牲にされたファンタジーも多々ある。そのいずれの場合においても、生身の人間の演出により、異性愛中心主義のほころび——その絶対性に隙間が

あるからこそ、それを維持するために禁止が必要とされること——が露呈するのである。このように、BLと異性愛中心主義との相対関係に焦点を当ててフェミニズムで議論することで、BLが腐女子以外の女性・男性にもたらず波及効果、及びジェンダー研究が目指すジェンダー構造の攪乱と解放の具現化など、BLの射程を広げることが期待できるのではないだろうか。

本稿では、BLファンタジーを構造化することにより、BL研究を新たな次元に導くルートの開拓を試みた。この視点を実際の作品分析に応用し、BLファンタジーという構造がこれまで多様化・進化し続ける作品の中でどのように「存在」してきたか、という「BLファンタジーの存在論」を系譜学のアプローチで考察することを今後の課題としたい。

付記

本研究はJSPS科研費JP20K20094の助成を受けたものである。

参考文献

- 相田美穂, 2008, 「腐女子とオタクの欲望／身体／性」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル—ジェンダー／セックスの二元論を超えて』明石書店。
- 東園子, 2009, 「女性のホモソーシャルな欲望の行方——二次創作〈やおい〉についての一考察」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学：記憶・メディア・身体』文理閣。
- . 2010, 「妄想の共同体——〈やおい〉コミュニティにおける恋愛コードの機能」東浩紀・北田暁大編『思想地図vol.5特集・社会の批評』日本放送出版協会。
- . 2015, 『宝塚・やおい、愛の読み替え—女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社。
- 美術出版社, 2014, 『美術手帖』2014年12月号。
- Butler, Judith, 1989, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York and London, Routledge. (竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)。
- . 2011, *Bodies That Matter*, Abingdon and New York, Routledge.
- 陳怡禎, 2014, 『台湾ジャニーズファン研究』青弓社。
- 張瑋容, 2013, 「『執事喫茶』における『BL的妄想』とセクシュアリティ—台湾人腐女子の『妄想実

- 践』事例から』『人間文化創成科学論叢』（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）第15号：pp. 291-299.
- 藤本由香里, 2007, 「少年愛／やおい・BL —— 2007年現在の視点から」『ユリイカ』第39巻第16号：pp. 36-47.
- 堀あきこ, 2009, 『欲望のコード：マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店.
- . 2010, 「やおいはゲイ差別か？」好井裕明編『差別と排除の〔いま〕⑥ セクシュアリティの多様性と排除』明石書店.
- . 2019, 「ラブ&エロの『やさしい世界』のクィアな欲望」ジェームズ・ウェルカー編著『BLが開く扉』青土社.
- . 2020, 「ポルノとBL」堀あきこ・守如子編『BLの教科書』有斐閣.
- 石田美紀, 2008, 『密やかな教育——「やおい・ボーイズラブ」前史』洛北出版.
- 石川優, 2009, 「やおい論についての批判的考察と今日の課題」『人文研究』（大阪市立大学大学院文学研究科）第60号：pp. 221-236.
- Rose, Jacqueline, 2006, *Sexuality in the Field of Vision*, London, Verso.
- 金田淳子, 2007, 「やおい論、明日のためにその2」『ユリイカ』第39巻第16号：pp. 48-54.
- 前川直哉, 2020, 「ゲイ男性はBLをどう読んできたか」堀あきこ・守如子編『BLの教科書』有斐閣.
- 松井みどり, 2014, 「少年の器、少女の愛——24年組とBLマンガの交差点」『美術手帖』2014年12月号：pp. 131-137.
- 溝口彰子, 2015, 『BL進化論：ボーイズラブが社会を動かす』太田出版.
- . 2017, 『BL進化論 [対話篇]：ボーイズラブが生まれる場所』宙出版.
- 水間碧, 2005, 『隠喩としての少年愛』創元社.
- 守如子, 2010, 『女はポルノを読む：女性の性欲とフェミニズム』青弓社.
- 向井雅明, 2016, 『ラカン入門』ちくま学芸文庫.
- 西原麻里, 2013, 「女性向け男性同性愛マンガの表現史：1970年から2000年まで」同志社大学社会学研究科博士論文.
- . 2020, 「男性アイドルとBL —— BLのまなざしで男性集団の〈絆〉の描かれ方を読み解く」堀あきこ・守如子編『BLの教科書』有斐閣.
- 新宮一成, 1995, 『ラカンの精神分析』講談社現代新書.
- Rubin, Gayle, 1975, "The Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex" In Rayna R. Reiter (ed.), *Toward an Anthropology of Women*, New York, Monthly Review.
- 榊原史保美, 1998, 『やおい幻論』夏目書房.
- サンキュータツオ・春日太一, 2016, 『俺たちのBL論』河出書房新社.
- Scott, Joan W, 2011, *The Fantasy of Feminist History*, Durham, Duke University Press.
- 高島鈴, 2020, 「オメガバースを読む：乱反射する欲望と現実」『ユリイカ』第52巻第11号：pp. 142-148.
- 田中東子, 2018, 「2.5次元ミュージカルのファン」『新社会学研究』第3号：pp. 50-68.
- 上野千鶴子, 2002, 『発情装置——エロスのシナリオ』筑摩書房.
- . 2007, 「腐女子とはだれか？サブカルルのジェンダー分析のための覚え書き」『ユリイカ』第39巻第16号：pp. 30-36.
- Wright, Elizabeth, 2001, *Lacan and Post Feminism*, London, Icon Books. (椎名美智訳, 2005, 『ラカンとポストフェミニズム』岩波書店).

(掲載決定日：2021年5月14日)

Abstract

The *Fujoshi*'s “Fantasy Trouble”: Body, Desire, and Imagining in the Ontology of Boys' Love Fantasy

Wei-Jung CHANG

The extant boys' love (BL) studies have focused on the *fujoshi*'s desire for romance between men and their resistance to the oppression of women. The increase of mainstream live-action adaptations of BL manga have resulted in the genre's exposition to wider audiences beyond the *fujoshi* community; hence, a more comprehensive theory must evolve to analyze BL's subversion to heterosexuality. This paper applies feminist criticism of Lacan's theory to structuralize the multi-layered fantasy of romance between men. First, it utilizes Lacan's concepts of the symbolic, the imaginary, and the real to structuralize BL fantasy. Next, it attends to the visualization of BL fantasy in the *seme/uke* relationship and illuminates its parodic confrontational connection to heterosexuality. It concludes its argument by coining the term *ontology of BL fantasy* to expose the rigidity and absurdity of heterosexuality and hopes to further develop a new perspective for future BL studies.

Keywords

eminism, sexuality, psychoanalysis, the symbolic/the imaginary, heterosexuality